第十二回

人生百年時代を生きる心得

社会教育家 田中真澄

たなか・ますみ――昭和11年福岡県生まれ。34年東京教育大学（現・筑波大学）卒業後、日本経済新聞社入社。日経マグロウヒル社（現・日経BP社）に出向し、『日経ビジネス』の創刊業務に携わり、販売手法の確立に尽力する。54年独立し、ヒューマンスキル研究所を設立。社会教育家として講演・執筆活動を展開。講演回数は七千回を超える。著書に『百年以上続いている会社はどこが違うのか？』（致知出版社）など多数。

「一身にして二生を生きる」人生の実現は夫婦協業が前提となる

「人生の幸福なんて、案外簡単なもの」

前回は人生百年時代を生きるための力を高める条件について考え、「人生は六十歳からが勝負」という「一身にして二生を生きる」に挑戦する生き方をお奨めしました。

実際にそういう生き方を目指そうとしている人がいま、徐々に増えつつあります。人生百年時代の一つの現象と申せましょう。その「一身二生」の人生を成功させていく人の共通項は、よき伴侶に恵まれていることです。今回はそれについて述べてまいりましょう。

『致知』誌の二〇二三年三月号特集「一心万変に応ず」のインタビュー記事に盆栽作家・小林國雄様が登場しておられます。私はこの記事を拝読しながら、小林様は専門職として独立していくために欠かせない要因を指摘してくださっていると実感しました。

私の四十四年の独立人生を振り返って思うのは、小林様も述べておられますように、城山三郎氏の『人生の流儀』（PHP研究所）の中にある「人生の幸福なんて、案外簡単なもの。仕事とよき伴侶の二つを手に入れさえすればいい」の言葉と全く同じことなのです。

私が仕事柄、サラリーマンから独立した方々をたくさん見てきて、つくづく感じますのは、独立成就の決め手は「内助の功」にあり、ということです。夫の仕事をどこまでも支えてくれる妻の存在があれば、夫はその仕事で何とかなっていくものです。

ある一流企業幹部の痛ましい独立事例

ところが夫の専門力は優れていても妻の支えがないために、途中で挫折する人が意外に多く、特に夫が一流企業の管理職であった人ほどそうなりがちです。安定した地位を捨てて、先行き不透明な自営業主に転身した夫の振る舞いが許せない妻が多いのです。

一つの例をご紹介しましょう。某有名企業の次長職にあった人の話です。その人は将来のために自分の専門力を活かして独立したいと妻に相談しましたが、妻から反対され、やむを得ず、自宅を事務所にして「ひとり起業」としてスタートしました。妻は夫への電話に一切出ないことから、夫は携帯電話だけで仕事を始めました。

それでも何とか二年ほどは続きましたが、どこまでも妻が協力してくれないために夫婦仲にひびが入り、遂に事務所を閉鎖。夫はその後、がんで亡くなりました。精神的なストレスが要因だったようです。この事例は、夫の独立には妻の協力が必須であることを暗示しています。

このため私は、企業内の管理職研修では、あくまでも一つの提言としてですが、「夫の起業に理解ある妻を！」と話しています。これから迎える長い人生で、老後、夫婦協業で起業に懸けるのも一つの素晴らしい生き方であるとし、それには妻の助力が絶対に必要であると伝えているのです。

妻の発するひと言に秘められた絶大な力

こうした提言には、私自身の体験がベースにあります。以前に触れましたように、四十三歳で日本経済新聞社を辞め独立した私ですが、退社を決断するまでには随分と悩みました。

日経マグロウヒル社での十年間、私は販売部門の責任者として、三つの専門雑誌の創刊を手掛け、どれも幸いに予想を上回る実績を収めることができました。それで私の将来は約束されたようなものでした。しかしそれでも独立への思いは断ちがたく悶々としていたのです。その状況から飛び出せたきっかけは、妻の次のひと言でした。

「あなた、乞食になる覚悟があれば、何でもできるわよね」

妻の実家は商家でしたから、商売の裏表について妻なりに分かっていたのでしょう、「自営で生きるのは容易ではないわよ。いざとなったら乞食になる覚悟はできているのでしょうね。それだったら私もついていくわ」との問いかけだったのです。

この言葉は、その後の私の大きな支えになりました。「よし、乞食になる覚悟で、どんな辛いことにも耐え、頑張り抜いて初志を貫徹しよう」と生きることに気合いが入りました。

小林氏が盆栽業界のトラブルで自殺を考えるまでに追い込まれた時、奥様の「お父さん、死ぬのはいつでもできる。仕返しをしてから死んでも遅くないよ」の言葉で立ち直れたと語っておられますが、やはりそうか、妻のひと言にはすごい力があるなぁと共感したものです。

「一身にして二生を生きる」人生に懸ける際、妻の心からの協力があれば何とかなることを、ぜひ知っておいていただきたいのです。

「一身にして二生を生きる」人生に懸ける際、妻の心からの協力があれば何とかなることを、ぜひ知っておいていただきたい